

マルセル哲学に於ける所有の問題（承前）

樋 元 和 一

二

然しそれにしても、我々の跡付けは先所有論へのそれに先立って、更に所有論発生の源泉となった初期の作品の動向の把握に赴むく必要に迫られる。というのは、かかる把握を抛棄は勿論閑却しても、思惟の内外に亘り推進された存在と所有の対質並に両者を横切つて差しかけられる死生の対決という両様の問題の重複的纏綿を最終的に解きほぐすことが不可能になると看做されるからである。そして我々にかかる必要性の根柢に初期の作品を貫いたマルセル思惟の実践的性格を据える。マルセルの所有論の展開は存在論と共に、かかる初期に培われ萌芽の中に潜勢的に陰約された実践的思惟の顕勢化の過程であると言つても過言でない。処でかかる実践的思惟が根づくのはマルセル自身の呼称に従つて述べる、生ける主体性である。当時のマルセルが如何にかかる呼びかけにその実践的思惟を凝集してかかったかは当時を回顧して物された次の表述に端的にうかがわれる。「当時ケルケゴールを全く知らなかった私ではあるが、彼の許では青春の泉 (Fontaine de Jouvence) であつたかかる生ける主体性に近付こうと努め乍ら方式を誤つた為に疲れ果てていた……」

此処でマルセルが当時と呼んでいるのはマルセルの不定型のまま書きとめられた翌作の体裁に於ける哲学的処女作とも言うべき『形而上学日誌』 (Journal métaphysique) の発刊に先立つ十数年間に亘る年代である。上掲の回想にうかがわれるように此の年代にマルセルが哲学追及に想い悩んだことは更にそれに先立つ約数年に亘る修学期間の研究成果を踏まえてその最初の研究発表の期間の研究行程の行詰りを示唆するものとして意味が深い。かかる修学期間にマルセルが接し、その哲学的思惟を肥やすに役立ったものは、カント哲学から始まり、ベルグソン、スペンサー、ブラッドレーの哲学を経て、コールリッジに及ぶ諸哲学思想である。

マルセル哲学に於ける所有の問題（承前）

る分析に超出する点で有限との併置に屈しない。それを敢て併置しながら問題解決を企ててかかる処にブラッドレイ風の新ヘーゲリヤンの無限観の偽証性——真無限と無際限との混同——がある。それは無限が絶対の名に於て有限を排除する意味でなく、有限的認識の不当な拡大を抑えて、「絶対を以て有限の真理と無とを……自らの中に含む体系として考えてかかる」という意味である。

かかる自己内包含は先づ有限の真理がどんな意味で可能かと問う必然性によって有限の觀念を深化することを前提する。かかる深化は限定的認識の秩序に於て実在を直指す有限な思惟にとっては実在は現存しえないという結論に行つく。このことは絶対的明識が有限な思惟の極標としては現存出来ないことに通じる。かかる現存無は現存をめぐって内在的弁証法から超越的弁証法への回向を不可避化する。内在的弁証法が相対的思惟に対応すると、絶対的弁証法は絶対的思惟に対応する。此処で思惟に於ける相対絶対の区別は現存を思惟の本質にかかわる極標契機と看做すか否かにかかる。このことは相対的で有限な思惟が意識一般の名に於て現存を自己への所与的存在と看做す反面に於て、自己を以て自己が条件付ける現存から解放されたものとして直接的には現成することである。人はそれによって現存の見地に関する根本的な相対性を覚知する。というのは現存が本質を内在的に負担するにしても負担は有限な思惟の名に於ける負担的措定者を予想し、斯くして現存は措定されると同時に否定される限界の継起としての生成に於て解消するからである。

之に対して絶対的思惟に就てはかかる生成言換えると内在的發展は再見されない。此処では凡てが先づ持続の『限界集中』(concentration-limite)としての無時間性 (intemporel) に集中されるからである。我々は此処でマルセルが「絶対思惟から凡ゆる意識の性格を引去る」という発言を重視する。というのは意識を持続の集中の極限として捉え、かかる極限に就く絶対意識が有限意識の展開を自己の巻戻された制限として措定するが、その反面に於てかかる絶対意識により立つ絶対明識自体の執意識性を排除する処に絶対思惟を据えてかかるからである。端的に言うと、マルセルは絶対明識が意識の働きに内在しない意味に於てこの語が実在としての存在に適用出来ないと看做すのである。

然し、如何なる意味に於て存在は意識の働きに内在しないのであるか。此処でマルセルの追及は絶対明識の自己否定から、後段の思惟の存在への関与の問題に移る。此処で先づマルセルが衝くのがカントに於ける認識の主体性の貫徹に附まとう不可認識者としての純粹主体の困難と矛盾性である。純粹主体としての不可認識者はそれが自己前客体 (objet devant lui-même) として措定されるが、かかる主体の二重性は凡ゆる実在的射程を欠く。それは純粹主体の認識を、措定する働き (acte) に吊り下げる意味で被限定よりも限定の立場に立つ有限な思惟に内在化させ

るからである。処が純粹主体の有限思惟に対する関係は限定的であることを許されなければならず、限定を措定に移しさえすればよいものでもない。存在としての實在への関与は認識ではなく、それを超える秩序に属する。純粹主体は客体化されない点で不可認識的であるが、不可思惟的でなくて思惟可能である。関与とは純粹主体を存在として非客体的超認識的に措定することである。その限り関与も思惟に服するが、それは限定的客体的従って認識の意味で思惟されるのではない。

然し純粹主体を主体的非認識的に措定すれば、関与の觀念自体に内属する矛盾を顕勢化する外なくなる。むしろ矛盾は関与の措定の行為によってのみ隆起する。此の場合の矛盾は関与の行為と反省の行為との間に不可両立性（論理的不連続）が在るといふ事實に必然的に関係する。即ち純粹主体としての思惟の存在への関与はそれを措定（觀念え改変）すれば反省がそれを矛盾視せずに居られない行為であるが、かかる反省による措定の取除きによって関与を純粹単純に滅殺することにはならない。此処でマルセルが仮定的に言及するかかる實在的行為は凡ゆる思惟に先行する行為であるが、反省だけがかかる行為の芯部に於ける矛盾を發見する。かかる發見は矛盾を関与という原初的行為（acte initial）え投企する反省を第二行為視しながら、その機能が関与の行為の内容の顕勢化にのみ存すると看做す場合にのみ適法化する。処が関与の名に於ける行為的事実は思惟が矛盾にもとづいて本質としてその措定を拒む觀念の事例（cas）と同様ではない。それから矛盾が行為自体に止住せず、觀念えの改変に止住することが知られる。

「関与は故に今や反省の優先限界（limite supérieure）として、言換えると反省がその前に立止まるべき行為として現れる。」その際明識は最早単に不可認識者の限定的意味での矛盾としては現れなくなる。それは不可認識者としての自己自身への呼びかけが絶対直接的認識の意味で無矛盾否超矛盾的に成り立つことに通じる。此処で反省に先行する第一行為としての関与と、それに後続する関与自体の矛盾の發見という第二行為としての反省は同一行為の与件として関係性の撻無に於て一体化する。というのは此処では「反省の二つの限界としての絶対直接的認識（純觀念的）と存在への関与とは最早相互措定がきかなくなる」からである。

人はそれも高次の思惟を予想すると言うかも知れない。然し此処で予想される思惟は反省自体の思惟的自己分裂を撻無する意味での超反省的それである。かかる謂わば思惟的直観の立場から「自己放棄する行為が今後我々が信と呼ぶものである」ことを確認する。信は存在にも関与一般にも関しないで不可認識者としての主体の存在への関与に關係する。その際関与はそれを客体に改変する凡ての分析方法を逸れる神秘として

本質的には現れる。それと相關的に神は行為を内的に思惟に結ぶ如き行為に於てのみ信によって捉えられる。従ってマルセルに於てかかる信に關して、先述の相互措定を絶対否定的に措定することが可能か否かが問題化し、それは如何にして思惟のそれ自身による不可認識者としての措定が可能かを覚知する思惟の限界措定の問題に転化される。思惟は最終的には思惟者 (*pensant*) としての自己自身を被思惟者 (*pensée*) としての自己自身 (認識関係の組成員) に比較しえない。そうすれば自己自身 (*même*) を他者 (*autre*) 化することになるからである。

「思惟は認識の行為を客体とするが、思惟はかかる行為に現在するものとして直接再認される」。それは思惟が凡ゆる媒介を超える超越の行為 (*acte de la transcendence*) によって自らが主体に同一化されることを確認することに通じる。之によって主体の認識の立場からの純粹思惟への論理的移行が何故不可能か又そうすることが無限で不毛な退行え還元されるかが了解される。が此処でより本質的問題はかかる見通しに立ってマルセルが「かかる行為は知的直観であり、それは (純粹主体としての) 思惟が客体として措定される認識関係の主体と同一なることがそれによって確認される行為である……それは明らかに信の原初的条件であって、知解の新型を創建する」と断定してかかる点に在る。このことは明らかにそれ自身不可認識者としての思惟の主体が認識関係の主体であると同時に、超認識的神秘関係の主体でもあることの認容を含蓄する。そしてかかる見通しを新型の知解として主知的に意味付けた処に形而上学日誌に直接先行する此の段階のマルセルの実践的思惟の歩みの特性がある。

関与の理論は勿論以上跡付けた『覚え書』第二二で尽されていない。更に同じく第一四と第一八で再捉されている。前者は一九一二年から一九一三年にかけ、後者は一九一三年から一九一四年にかけて作成されたものであり、何れも小品で第二二の基本線の踏襲に於て成り立っている。我々は此処で『形而上学日誌』に先行する、以上摘録した諸作の如く、その発足の源泉となったものでなく、更にその直接の背景となったものとして『ロイスの形而上学』を挙げる必要に迫られる。というのは『覚え書』並びに『シェリング哲学との關係に於けるコールリッジの形而上学的觀念』が『形而上学日誌』の成立に源泉乃至素地的意味で寄与したに對して、『ロイスの形而上学』はその分癡乃至飛び地的意味をおびる点で、それと相補的であると考えられるからである。『ロイスの形而上学』 (*La Métaphysique de Royce*) は一九四五年 Aubier 版で発刊されたものであるが、細部を除くと一九一七年から一八年にかけて『形而上学と道德雜誌』に公表されたものの再現である。その序論でマルセルは説いている。「此の研究で私はフランスでは余り知られていない教説の主特性を固定し度い。之はここ半世紀以来基本的な形而上学

的問題に一つの解決（それは主知主義、実用主義、直観の世紀という夫々狭い限界を超える）を与える為になされた最も大胆な試みに対応する」と。それは解釈の理論が解釈する自己と解釈される世界とに跨るといふより、跨り自体をも自己と世界との包括的知解に於て超越する絶対共同観の立場に拠り立つ。此処でマルセルはロイスの三一性 (trinitisme) が伝統的認識論との関係から一つの進歩をしるす点を指摘する。かかる進歩は「経験¹⁸⁾と反省の共通の源泉に遡って問と答で手続する活動の意味での精神の弁証法的生と呼ぶるものをその統一に於て捉えることがどうして可能になるかを示す」一点に止住する。

凡ゆる弁証法的な思惟はその心部で問と答が出会い且つその事実を識る行為を指向する。かかる行為が又措定される問の前に赴むべく、独立的に措定される実在から切離される解釈者の関与に外ならない。マルセルはかかる関与としての行為をその僣存在として扱えるか、それとも存在とはかかる出会を実現することだと言いえるかを立ち入って吟味する。

関与としての行為とは問答を横切る問い併せに赴むく確実化の経験である。確実性のそれではない。確実性に於て理性は存在に到達する行為自体に結び付けるが、確実化即ち不確実性に附纏われる場合には理性は存在に到達の行為に結び付けない。それから先掲の二者択一の問題に光が投げられる。即ち行為はその僣では存在に値せず、逆に存在とはかかる出会を実現することになる。かかる実現に於て問い併せが無限に反復されることは云う迄もない。

その為には先づ実在の解釈を分有する絶対と相対の両解釈の相関に先がけて絶対解釈が可能となる絶対経験に触れねばならない。「真理¹⁹⁾が可能以上のものであると確認することはそれを認識する経験の具体的実在を確認することである」とのロイスの表述を踏まえて、マルセルは「かかる絶対経験が神自体であり、神の全知が全能と意識と自己所有、善性、完全、至福を包容する」という洞見に及ぶ点を指摘する。というのは経験又は視像としての絶対は観念の体系を實在化する、否かかる實在化自体であるからである。そしてかかる絶対経験が絶対経験の経めぐりによる精神の完成に役立つとすると、かかる経めぐりは「相対²⁰⁾経験のおびる有限性に対する制圧的戦を余儀なくする。」我々が有限性を免れようとすれば、かかる制圧に進んで服しなければならぬ。其処に展開されるのが神聖認識に通じる絶対解釈である。

かかる神聖認識の様相は重複的に差しかけられる。先づマルセルはロイスが観念の所有主としての我と観念自体としての我を識別し、後者に我の真正性を帰属させる点を指摘する為に我がそれに付て持つ限られた意識を溢出することを条件として始めて、我はかかる観念乃至信である

と云えないかと反問し、「我が持ち、領有し、その凡ての切子面 (facettes) をきらめかせる観念は最深の意味で私のものでなく、凡ゆる場合我ではない」ときめ付けている所説を引用する。持つ者としての我が他を異類者として我から疎隔し、生の共有を拒むに對し、在る者としての我は他を同類者として扱い、その生を共有する。が共有は他相互の離在を遂に埋めない。同類性は究極に於て充足されない。逆に神聖計画にもとづく統一にもかかわらず、他との生の共有は一挙に招来されず、自他の同一化を目指して同類性を具体的に推進するよう我々を駆り立てる。同一化が現実的に実在化される為には意識的我的主動性を抑えないで逆に実在そのものたる神の原動を要請するに至る。ということは神の原動を内意識的に辿ることから、意識を超える神の存在を想定することである。

かかるロイスの解決がマルセルに不十分と映ったのは意識外の実在者を意識内の可能性の現実化に協働する名に於て、意識の働きの内部に於ける所与に封じ、それを意識内容の全一化の部分と看做した点に在る。従ってそれに負わず神秘的直観の名に於ける不可分の統一はその完成をしない。弁証法自体に其れ自身を吊り下げると同様に、それが内含する永遠は時間に身入れし乍らそれを免れようとする思惟にかかわる外なくなる。それは実在論の名に於て自らが拒否する誤りに再落することになる。そして「……絶対を要求する思惟に絶対を關係付けることにより、要するに根源的独立に於て絶対を思惟することを拒否することにより、絶対を抽象的で不齊合な幻想 (fantôme) とするに至る」と反論する。

かかる反論を支えているのは弁証法的思惟と絶対との二元論の一元的統一の企図が真の絶対の総合的生動的統一に於て解消されるという見通しである。かかる解消はロイスの形而上学が絶対存在としての神の思惟に対する超越性を否認して、凡てを見る神を包括的秩序の頂点に据える反面、神の思惟に於ける内在性を遺失して、神が無数の凝視 (regards) に於て我々の個別的経験の変遷の凡てに連接する、弛んだ統一観に陥り乍ら、之等二つの様相を矛盾する外観に於て和解させんとする空疎な努力に陥る点を看破し、それを克服する方向に於て推進される。要するにロイス風の神観が神の無限の身遠さと無上の身近かさとを弁証法的操作で平板に均り合わす意味で厳密に過ぎる統一観から真の神性への肉迫参入に就く精神的発展の豊かな不可予見性を逸する点を衝いて、かかる逸失を埋める必要があると言っているのである。そして「ホッキング (W. Q. Hocking) の許で正確化されるような存在への関与の理論が我々の限定する二者択一を超越させる」と看做す。

それにもかかわらずマルセルが『ロイスの形而上学』から深い感銘と強い示唆を蒙ったのが「……要するに所有でなくて、存在が問題である……」の表白にこめたロイスの自己創造観 (se faire) である処に、我々は次に述べる『形而上学日誌』の論旨との関連に於て深い意味を見出

す。しかもかかる自己創造は人が虚無に於て捉える一種の飛躍でなくて、歓喜に於て熱情的に意欲される、非実体的魂という意味での全き自己自身の固執である。そこに『日誌』を貫く存在と所有の対置という思想の一つが築かれる素地が培われたと言っても過言ではない。このことは「私が後に間主体性 (intersubjectivité) を極めて強調したとすると……それはロイスとホッキングの講読で強化確保された……経験の名に於てである」という述懐如何にかかわらず維持される。というのはかかる間主体性の基盤に据えられるのが問題と神秘の判別と並んで、存在と所有のそれであると考えられるからである。其処に又『ロイスの形而上学』がマルセルの所有論の生成の背景に於て占める独一な意味がある。

註

- (1) G. Marcel, *En chemin, vers quel éveil?* 1971, p. 10. cf. G. Marcel, *Fragments Philosophiques, Introduction par Lionel A. Blain*, p. 6.
- (2) マルセルによると、「私は『形而上学日誌』は単なる予備作と考え、かねてから論考の性格を持つ作品を何日か制作しようとして望んでいた。……私がその刊行を受け納めたのは……それがそれなりに自足しているのと、私の思惟の様式が教義に類した完成を排除すると認めたからである。」(G. Marcel, *En chemin*, … p. 130)
- (3) 本年代が大体に於て一九〇九年(時にマルセル二〇才)に合格した学位請求論文向けの或はそれをめぐる覚え書き執筆の年代に当ることはトロワフォンテーヌの跡付けに徴して確かめられる。トロワフォンテーヌ (Roger Troisfontaines) はマルセル哲学に関する総合的研究の成果とも云うべき『実存から存在へ』(De L'Existence à L'Être, Tomes I et II, 1968) に於て、形而上学日誌以前乃至同時代のもを(一部以後のものにも触れる)成立年代順に手記として第二巻の巻末に分類し、(cf. *Id.*, *ibid.*, t. II, p. 422-23) その成立の経緯に示唆に富む照明を加えている。トロワフォンテーヌは先づ『日誌』以前の手記を第一から第二三に及ぶ二三の覚え書に分け、更にその中の第一に及ぶ覚え書を『形而上学日誌』の起案に先立つ第一群に、第一二から第二三に及ぶそれを起案用の第二群に集録している。之等両群の内容的区分は年代的に多少重複するが、一九〇九年即ち学位請求論文の成った年を境目に前後の二期に段別されている。(cf. R. Troisfontaines, *De L'Existence à L'Être, La Philosophie de G. Marcel*, t. II, 1968, p. 422-423) 因みにブランが序論の形の自註を加えて輯録している(前掲引用書参照)のは以上の両群に跨る第九、第一二、第一四、第一八の各覚え書きである。
- (4) 註(3)の学位請求論文用宛てられたのが本書であり、一九一〇年初版の折は本文通り *Les Idées métaphysiques de Coleridge dans leurs Rapports avec la Philosophie de Schelling* の書名が冠せられたが、復刊された近著では単に『コールリッジとシェリング』(Coleridge et Schelling) と銘打たれている。
- (5) 「事実本書中での私の或る主張は今日も批判に値するし、私はコバン (Catherine Coburn) によるコールリッジの手帳の刊行(現在未完)後、之等の労作はより異った、もっと実存の見通しに於て採り上げ直されることが出来よう」(G. Marcel, *Coleridge et Schelling*, Paris, p. 7)
- (6) マルセルは本書刊行の年代(一九六七)に先立つ十年間に彼の固有の労作に関する反省が moi に於ける詩人と哲学者の關係に更に集中したことに關連してハイデッガーもホルデルリン、リルケ、トラクトルに関する研究で同様の關係に傾いたことを回想の要があると指摘している。(C. et Sch. Préface, p. 11)
- (7) R. Troisfontaines, *ibid.*, notes antérieures au projet de thèse, XI et X, t. II, p. 422. cf. Blain, *ibid.*, pp. 15 et 16.

マルセル哲学に於ける所有の問題(承前)

マルセル哲学に於ける所有の問題（承前）

- (8) R. Trofontaines, *ibid.*, note IX. cf. Blain, *ibid.*, 16.
- (9) G. Marcel, Coleridge et Schelling, Préface, p. 10.
- (10) マルセルによる「ブラッドレイに関する著作に手をつけることが学士号を手にした後の私の最初の意嚮であった。……ブラッドレイの何に牽かれたかと問われると、推定的な答しか述べられない。『外観と実在』の著者ブラッドレイで私を注目させたのは形而上学的確認に付いての強力な感覚が反省——それはアングロサクソンの心理学の伝統的所与に真の変動を加えた——と合一していた点である」。 (G. Marcel, *En chemin*,..., p. 70)
- (11) L. A. Blain, *ibid.*, p. 43.
- (12) *Id.*, *ibid.*, p. 60.
- (13) *Id.*, *ibid.*, p. 62.
- (14) *Id.*, *ibid.*, p. 64.
- (15) *Id.*, *ibid.*, p. 66.
- (16) *Id.*, *ibid.*, p. 66-67.
- (17) G. Marcel, *La Métaphysique de, de Royce, éd. Montaigne, 1945, p. 5.*
- (18) *Id.*, *ibid.*, pp. 214-215.
- (19) Josiah Royce, *Conception of God*, p. 41. cf. G. Marcel, *Métaphysique de Royce*, p. 53.
- (20) J. Royce, *The Philosophy of Loyalty*, p. 392. cf. G. Marcel, *Métaphysique de Royce*, p. 53.
- (21) J. Royce, *The World and the Individual*, t. I, p. 382. cf. G. Marcel, *Métaphysique de Royce*, p. 60.
- (22) J. Marcel, *ibid.*, p. 217 note 2.
- (23) *Id.*, *ibid.*, p. 221.
- (24) *Id.*, *ibid.*, p. 223-224.
- (25) マルセルのホッキングとの思想的共鳴はその実生活に於ける交遊の想い出「一九六一年私はホッキングとニュー・ハムプシャイヤーの隠棲所で永遠の伴侶を確認して、『我々』と語り交は及んだ……」(cf. G. Marcel, *En chemin, vers quel éveil ?* p. 67) にも十分偲ばれる。
- (26) G. Marcel, *Métaphysique de Royce*, p. 71.
- (27) G. Marcel, *En chemin, vers quel éveil ?* p. 67.

三

以上の諸点の考慮に於て、更に醗酵的先所有論の段階の跡付けに立ち向うに当り、先づ指摘を要する点は一一般的に言って、年代的には一九一

四年から一九二三年に差しかけられる『形而上学日誌』生成の段階が資料的には『形而上学日誌』を主脈に、『ロイスの形而上学』を支脈に擁して平行的に辿られる点である。勿論かかる平行は相交わらないそれでない。というより支脈を思想的貯水池とし、それから多くを汲むことによつて、主脈は成立している。之は主脈が発想的には何れも以上指摘した源泉から発出した処から来る当然の成り行きである。然しそれにしても主脈が先所有論の展開に於て占める主導的位置と役割は動かない。更に所有の問題に限定して採り上げる場合、『ロイスの形而上学』を中心に、それが『日誌』に与えた内容的影響に付ては既に本論二の末尾で指摘した通りである。逆に『日誌』を中心に、それが『ロイスの形而上学』から蒙つた影響に付て述べると、『形而上学』の成つた年代（一九一八年）以後、『日誌』に於て所有の問題に関する言及が積極化していることが指摘される。

かかる作品相互の外面的な比較考察を踏まえ『日誌』自身の内面的な跡付けに這入るに当り、それは『形而上学日誌』全体に対するマルセル自身の見通しと、それにもとづく構想上の脈絡に即して行われねばならない。処で『日誌』の序言中の次の所説はかかる見通し乃至構想に付て端的に理解の手がかりを与えて呉れる「本日誌は全く異なる二つの部分を含む。即ちその第一部は……弁証法的手続で実在を計量する凡ての教説に反対する方向を辿つたが、結果に於てそれに与するに至っている。……第二部は之とは全く異なる。思惟の普遍的條件の深化の中に純粹神秘の要素を見出そうとする望みを絶つて、むしろ凡ゆる合理主義が巧みにごまかす異常性に私の反省を集中しようとした。……然し神秘的であると同時に精神の操作に於て主座を占める目的性に関して既知のものにふさわしい出会いによつて、私はかかる省察の結果が原初的な私の弁証法の結論を接合するに至っていることを確認する。……然し第一部は第二部の論理的な腰石(soubassement)を含む、両者は相互に分離出来ない⁽²⁾と信じる」
かかる所説にもうかがわれるように、『形而上学日誌』は弁証法の採り上げ直しにもとづく新しい理論の打ち出しである⁽³⁾。従つて当初から所有論に宛てがわれたものでない。然し存在の問題と並んで所有の問題との対決がかかる理論構成に不可避化される限り、そこに所有論の素地が啓開されることは免れなかつた筈である。かかる見通しに於て、我々は更に同序文の末尾でマルセルがゆくりなくも吐露した述懐「人は本日誌の中に、明らかに判明された或種の精神能力の接合的努力——それは先づ我々の内的見守りを途方に暮れさすように仕向けられ、次で神秘と（識る人ぞ識る）智慧の要素を何時の日か収束することがそこで可能となるような経験と省察の新しい場に適うよう仕向けられた——を見よう……」に添つて、日誌全体の所説から、所有論の素地——それがやがて醗酵的先所有論に通じる——にふさわしいものを指摘することを志した。

マルセル哲学に於ける所有の問題（承前）

就中我々がその際重視したのはこの表述中の『経験と省察の新しい場』という発言である。之はマルセルの所謂『経験の所有』に通じるものと考えられる。かかる発言は或る意味では『思惟⁽⁶⁾による存在の所有』に呼応する。かかる呼応は存在の所有が経験の所有という場で摘録される意図を反映する。言換えると存在の所有という直接経験の事実は直接的であっても、経験の枠を出られない限り、経験の所有が目指す立証の手續きの中に組み込まれ、そこで包括的に位置付け直されねばならないと言っているのである。マルセルの「私は思惟としての、意志としての我自身の、経験的な我自身に対する関係を措定する外ないことを発見する。我はかかる二元論の統一を明識する彼方に思惟を向けねばならない。……かかる統一は時間の外でのみ思惟されうる。之は我が無媒介に我自身に結付く非時間的な行為によって、意欲したものとして我を考えねばならないと言ふことである。」

然しかかる我は直ちに中心ではない。中心が我を離れてないことは云う迄もないが、我は飽く迄中心付けの主体にとどまり、中心自体ではない。中心は我が関係的存在として関係性の中で位置を占める処に差しかけられる。「形而上学者が立場 (position) を追及する病人になぞらえられると私が言う場合、私は素晴らしい暗喩を用いることになる」と信じる。困難はそれとの関係に於てかかる立場が限定される中心を判別する点に在る」という表白は当面する所有の問題に限らず『形而上学日誌をも含めて、全著作を貫流する基本動向である。マルセルの哲学的追及は思惟による存在の所有に方向付けられた中心付けをめぐって原動し、かかる存在の所有が形而上学的精鍊を経て、経験の所有を包括的に中心付け得ることを立証する処に差しかけられたと言つても過言でない。先掲の絶対経験が相対経験を接合的に包越すると看做す所以は其処に在る。然し本論の狙いから言つて、此処で問題になるのはかかる理論的構想の手續面での仕組でなくて、仕組の条件として所有に附托された意味と階位である。此の段階で所有に附托された意味は理論的把握であり、又階位は即自のそれであるとうかがわれ、むしろ、即自の階位に即して使用された故に把握の意味以上の意味が附托されなかつたと云える。

然し先存在論的醗酵の段階が進展すると共にかかる即自的階位に対応する直接的な所有観は当然動揺を免れず、かかる動揺は理論的成熟乃至深徹と対応した。処でマルセルは一九一九年二月三日附の日誌で「私は更に私が在るものと持つものとの間に設けようとする判別が明晰どころでないことを偽りはしない」と告白している。今之を先に引用した醗酵的先所有論から発光的それへの転換を告示する先掲の、一九二三年三月一六日附の日誌と対照すると、両者は消極と積極という差はあつても共に所有の問題への取組の意図をうかがわせる。然し前者の判別をめぐ

る否定的発言はその時点迄の展開が存在と並んで所有の問題に関する沈潜 (sinnerger) の段階にとどまったことを逆証し、又後者の同じく判別をめぐる肯定的発言はその時点迄の展開が同じく穿やく (creuser) の段階であったことを逆証している。その限りに於て当面する醗酵的先所有論の段階は更に沈潜と穿やくの兩段階に細分することが出来る。

かかる細分的段別は勿論先に指摘したマルセル自身が『形而上学日誌』に加えた第一と第二の兩部に亘る構想的見通しとその俣相蔽わない。然し全く無関係、無縁にとどまった訳でもない。『形而上学日誌』の第一部の末尾の日時一九一四年の五月八日が先掲の沈潜期間の終末の日時一九一九年一月三日と編年的に喰違っているという形式的理由を楯にとつて兩様の区分を無関係視するのは行き過ぎになる。在るものを持つものの不判別の表明に先立って存在と所有の判別が客觀的問題性对主体的現存性の判別の遂行の最中で徐々に不判明乍ら推進されたことは想像に難くない。そして兩様の判別このことは經驗の所有と思惟による存在の所有との絡み合いに成る理論構成の道程の中で明滅し乍ら存続したと言える。絡み合いが實在への肉迫の手續を象徴する問題追及の段別の媒介の横系とすると、兩様の判別は問題の所在の突き止めを象徴する同じく追及の系列的な縦系と呼ぶことが出来る。

処で横系に當る經驗の所有と思惟による存在の所有は又經驗と包經驗に跨る兩様の所有で對置される。所有される經驗内容が潜勢的不判明にとどまる段階では兩様の所有の弁証法的媒介性は鋭化しない。それが顕勢的に判然化する段階に至ると、かかる媒介性は鋭化する。然し反面から考えると、かかる鋭化故に實在の構造は明確化するのである。今縦系に當る兩様の判別にかかる鋭化の實質的組成分と看做すと、それが平行から交錯の行程を辿る外なかったことは当然の成り行きである。問題の核心は鋭化という肉迫の手續と交錯の判別という問題の所在の両面に跨つて實在の照明が企図された際、手續面に映發される所有と所在面に映写される所有 (存在との對置に於ける) の差別の帰趨にかかる。その際存在に対する所有という所在面に於ける所有の判別と、かかる判別を捲込む所在面に対する面接と相即的に肉迫面に於ける兩様の所有の手續の判別とが重複して所在の問題の解決を困難にしたことが注目される。

然しかかる困難は行為的現在への到達を境に解消された。醗酵的先所有論の段階から次の發光的その段階への轉換的踏み込みを告示する先掲の一九二三年三月一六日附の日誌は又かかる到達を反映する。然し醗酵的先所有論の段階だけに限って言うと、かかる段階を前後に兩分する沈潜と穿やくを轉換的に媒介する契機となつたのは身体性の問題である。それは経緯に亘る先所有論の展開を脈絡付けるに当り欠かすることの

出来ない、箴の役割を果たすと云える。その間身体観自体が客体的身体から器具的身体観を経て最後に非器具的身体観に精練されたことは箴自体としての身体が生組成と呼応して変容を蒙り乍ら、先述の両様の判別を行為的現在に融合すると共に自らもかかる融合に参入するに至ったことを示す。受肉的身体がその僣行為的現在に通じる観方はかかる参入を反映する。

その際我々は醗酵的先所有論の展開を担った縦糸的系列即ち両様の判別の平行から交錯え及ぶ潜勢態を告示するものとして、人間の生のいとなみが保有する各種の面をめぐってマルセルが『日誌』第一部の冒頭にかかげた次の行文を挙げる事が出来る。「そこでは世界が無意味化するばかりでなく、そうした世界の一つがあるかどうかを問うことさえ矛盾する面がある。それは直接的な現存の面である。それは異変 (fortuit) の面、偶然の秩序である。我々は反省によって、そこで知解的なものが現れるような連続的な面に高まる事が出来る。私が措定する問はかかる諸面の間に存在論的差別があることを確立しうるかどうかを知る点に至る。」¹²⁾ 此処で異変対連続で対置される面が暗示するのは外ならぬ現存性対客観性のそれである。それに存在論的差別を加えようと言うのである。このことは『日誌』を最初から主導したのが存在論的思惟であって、所有論的それではないことを反映する。之が当段階に於けるマルセルの設問の基本態度である。

然し一見すると存在論的と受取られるが、実は先存在論的なかかる思惟方式も、その故に存在の問題その一方的傾斜に於て、没方式的に辿られた訳ではない。¹²⁾「ここで私が専念する問題は方法の問題である。先づは實在論と純粹主観主義とを同時に避けることによって、哲学的思惟の位階性を基礎付けることである。次で哲学史に関してはヘーゲルの態度と関係付けながら私の態度を限定し度い」¹³⁾の発言はこの間の事情を端的に伝える。此で『哲学的思惟の位階性を基礎付ける』という此処での発言を、本引用文に直接先立つ表述「……此処で神聖な超越の間 (question) が無視されていることが直ちに知られる」と読み併せると、かかる基礎付けが目指す位階性に加えようとしたマルセルの見通しの特性が判然とする。此処でマルセルが衝いているのは位階化される思惟の面が存在自体の面、實在が在るが僣に在る面、神が實在を見る面とも言うべき絶対の面 (plan absolu) との関係によって観念的に秩序さたと信じてかかるライブニッツ、ヘーゲル風の思惟方式である。

このことは位階性に於て両者に同調し乍ら位階観自体に於て両者と袂を分つ意図 (内在的連続観に対する超越的不連続観) の宣明と受取られる。従ってマルセルが専念する方法の問題とは観念的に措定される存在論的秩序に対して、それとは独立に位階性が實在的に措定されるそれらめぐって差しかけられる。此で位階性に於ける観念的と實在的との対立は秩序に於ける所有論的と存在論的という対立と混同もされなければ

離もされない。位階性に所有と存在という状況的判別の問題が絡まり、又秩序に観念的と実在的という主体的判別がまとわるのはその為である。然し何れにしても思惟を離れては位階も秩序もない。位階と言ひ、又秩序と呼んでも思惟の、位階であり、又秩序である。然し更に掘り下げて考えると、位階も秩序も思惟のものであるが、思惟に尽きるものではない。思惟が試練にかけられる処に位階も秩序も問題化する。

このことは思惟が位階と秩序の相関的判別を横切つて、自他のそれを喚び込み、主体に決断を促す点で、その促思惟の運命が思惟する個体的主体の安危にかかわることを意味する。そしてかかる差しかけの場が経験に外ならない。此処での経験は勿論流動する経験である。経験が生の経験として辿られる所以は其処に在る。問題は生の経験が経験の主体をして思惟の方法を道程的に追及することを余儀なくさせる点に在る。上來說いて来た問題の所在と肉迫の手續との不可分の相関もかかる道程的反省を背景にして始めてその真意が了得される。極論するとかかる反省は当面の先所有論に限らず、全著作を貫く基本的立場である。マルセルが接合という言葉で『形而上学日誌』で瀕用する意図もかかる不可分の相関の進展に伴い、見通しに変容を蒙ることの配慮に成る。

処で位階、厳密に言う位階化は深徹と相関相剩する。というより道程的反省に於ては潜勢から顕勢に亘る展望の開展が位階化と深徹化とを両翼に擁するということに改められねばならない。事実マルセル自身此の点にあらさまには言及していないが、『日誌』に盛られた形而上学的思惟の時代区分に伴う深厚化（接合に象徴）はかかる反省の裏付けをうかがわせる。此の点の考慮に於て、先所有論的跡付けの分節的劃定で直ちに問題化するのは経験の所有と思惟による存在の所有とに跨る経験の相互媒介的粹付けでなくて、かかる粹付けによって粹付けられる形而上学的思惟の道程的進展に伴う変容である。凡ては経験の進展にかかるが、かかる進展が夫々の時点で具体的に告示するのはかかる変容を集約的に指示する言表である。先に我々は醗酵的先所有論の到達点の言表に現在、厳密に言う共同現在を据えたが、それは飽く迄到達の言表にとどまり、言表はそれ迄に幾変遷を蒙り乍らも、夫々が夫々の時点での思惟の水位と水位に到達する迄の変容を告示する。その限りに於て、夫々の時点での言表は変容の成果と到達の水位とを併せ告示するマルセルの形而上学的思惟の進展の里程標と受け取られる。

我々はおかかる言表にもとづく里程標をマルセルの呼称に従つて一応主体的現存と境域的現存と試練的現存と境域的現存と生成的現存と全一的現存で押える。そして之等六通りの現存が夫々差しかけられた時点で夫々を支えた六種の経験——限界、純粹、批判、人格、原本、直接——に夫々対応することが改めて指摘される。只此処で看過されてならないのはかかる里程標が先所有論固有の段別に無差別的に適用されるものでな

いが、先所有論が先存在論との相関的対置に於て、かかる里程標をめぐって常に巡回した限り、それを先所有論の段別に基本的に押し及ぼすことが出来る点である。勿論かかる里程標えの着眼に成る細分的段別によって、先掲の存在と所有に関する不判別の表明を手がかりとする醜醜的段階に関する沈潜と穿鑿の両段別が撤回される訳ではない。むしろ却って之等両段階に以上指摘した六通りの小段階が両分的に配属され、夫々が更に三小段階に細別されるに過ぎない。

(未完)

註

- (1) G. Marcel, *Journal Métaphysique*, 1935, Introduction, pp. IX et X.
- (2) マルセルはかかる第一と第二の両部の内的関連に於て、裏話の形で、その成立の事情を次の様に述懐している。「……第一部の各頁は私が制し切れなかった焦燥感を催させないではおかない。……私が愕くのはかかる抽象的で不当な研究が根本的には私が当時身を置いた安楽と安心の条件に従属していることである」(En chemin, ..., p. 80)「然しより深く考えると、私を実存的思想家にしたばかりでなく『日誌』の第一部にうかがわれる観念的残滓から全く離脱させたのは戦争である。……」(Ibid., p. 97)「人は此の経験によって私の中に促進された反省の本質を第二部の中に当然見出すであろう。……それが決定的であったのはそれ迄は思弁の対象に過ぎなかった或る経験の能動的な性格をそれが直接不可抗的に示したからである」(Ibid., p. 107)

以上の述懐に関連して我々の関心を喚ぶのは一九一六年から一九一七年の冬期間の数ヶ月に亘って激甚に行われたとマルセル自身が摘録する戦争体験に関する形而上学的反省が直接的に彼自身の人格形成と思想的深熟に寄与した事実である。「一九一四年の戦争が私を別人に仕立てたと言つと、それは紛れもなく一方それが憐憫の感覚を私の中で喚醒しました為であり、……他方又それが秘密の実在という領域に入るよう仕向けた為である」(Ibid., p. 108)の表白は之を裏書きする。然し他方後年に於ける「一九一五年から一九一八年に亘つての私の控え帳には自己独自と言つてよい人格的な哲学的没頭の痕跡は何等見出されない。……私は私の宗教的展開に関する戦争の投影に於て今日自問した」(cf. Ibid., p. 97)の申し立ては戦争体験が哲学的反省の素地の啓培に役立ったことは否めないが、理論構成の名に於ける反省の自立的啓開には寄与しなかったことを間接的に反映する証言と受け取られる。

- (3) 当時を回想する処に成り立ったマルセルの次の所懐はかかる評定の偶然ではないことを裏付ける。「一九一四年の大戦直前の年代に抱いた私の意図はそれをヘーゲルの型の体系中に全一化しようと考えてはならない意味で、私に疑う余地のないものと写ったかかる宗教的確認の秩序を本質的に明らかにすることを目指す或る追及に打込むことだった」(G. Marcel, *En chemin, vers quel éveil ?*, 1971, p. 71)
- (4) G. Marcel *Journal Métaphysique*, p. XI.
- (5) 「私はメルグソンに於て純粹憶起 (souvenirs purs) 自身が目録を体制化する傾きがないかどうかを知り度い。……学び知る (apprendre) とは……その目録を豊かにすることである。経験を持つ事実の中に最深のものがあることはそれがかかる行為に還元されることではない」(cf. *Journal Métaphysique* p. 176)
- (6) 「形而上学的要求は超越的な好奇心でなくて、むしろ嗜欲 (appétit)、存在の嗜欲である。それは思惟による存在の所有を「目指す」」(cf. *Journal Métaphysique*

p. 279)「此処で存在とは…所有されねばならない或るものであることが示されねばならない。…但しよく考えると、(贅辞として)『cf. Journal Métaphysique p. 180, et note I』」

(7) G. Marcel, *Journal Métaphysique*, p. 6.

(8) *Op. cit.*, p. 281.

(9) *Op. cit.*, p. 219.

(10) 我々は此処で之等沈潜と穿さくという両用語が夫々の段階で濫用されているという形式的理由だけで、一兩段階を特性付ける指標に両用語を撰んだ訳ではない。更に段階が所有の問題で塗り潰されてない点を考え併せると、此処でかかる特性付け自体が無条件的に認められなくなる懼れは十分にある。が一般的に言って、失当でないと考えられる故に敢て充用した訳である。

(11) G. Marcel, *Journal Métaphysique*, p. 3.

(12) *Op. cit.*, p. 4.

(13) *Loc. cit.*

(14) 人は先に引用した『日誌』の序文末尾の行文「精神能力の『接合的努力』(l'effort conjugué)」を『道程論』の結論と銘打たれない結論中の次の一節「……むしろかかる右ころ道、年余に亘り私としては困難を極めた、ためらい、よろめく歩みこそが厳格的に強調されねばならない」(cf. G. Marcel, *En chemin*, …… p. 292)と読み併せると、かかる道程的反省の性格を端的にうかがい知ることが出来る。